フィールドワークを活用したアカデミックスキルの教育
――国際関係学科「基礎演習Ⅰ」における取組み――

東　弘子・亀井伸孝

1．はじめに

2009年度に開設された新「愛知県立大学」は、本年度（2012年度）、完成年度を迎えることとなった。大学設置時に新設された国際関係学科でも、初めての卒業生を出すことになる。

外国語学部では、新カリキュラムを整備するにあたり、各学科・専攻の独自性を保ちながらも、科目名称や科目カテゴリー名称、基礎科目に関する単位数などについて、学部全体での統一をはかった。その中で、３・４年次に履修する「研究演習」（８単位必修）にそなえ１・２年次のうちに基本的なアカデミックスキルを獲得するための科目として、全ての学科・専攻に「基礎演習Ⅰ」（１年次に半期１コマ：２単位必修）「基礎演習Ⅱ」（２年次に半期１コマ：２単位必修）が設定された。

１・２年次で身につけてほしい基礎学力・調査法・表現法の基礎については、学科・専攻によって、もしくは教員によって考え方は異なるであろうが、国際関係学科では「基礎演習」「研究概論」といった基礎科目のありかたを、学科として議論を重ね方向性を探っている。「基礎演習Ⅰ」で実施している教育内容については、担当者による報告会を開き意見交換をしており、「基礎演習Ⅱ」の実施方法については、年度ごとに試行錯誤を重ね、今年度は担当者４名が同じ時間帯に同じシラバスで実施することで、学科カリキュラム内での位置づけを明確化してきている。

このように学科として「基礎」を重視しているのは、多様な学問分野を専門とする教員から構成される学科において、学生が自主的に自分自身の課題を見つけ出し、その課題解決のために自律的に調査する態度と方法を身につけておくことが重要だと考えるからである。

本稿では、本稿執筆者が担当する国際関係学科の「基礎演習Ⅰ」の授業実践を報告し、その効果や課題について述べる。今後のカリキュラム改革

も見据えての実践報告であり、多方面からご意見をいただければ幸いである。

2．授業活動

2.1　授業実施概要

国際関係学科では「基礎演習 I」を 1 年次の後期に配置し、機械的に一学年（定員40名）を 2 クラス（専攻言語の英語科目と同じクラス）に分けている。そのシラバスは、学科設置にあわせ本稿執筆者の一人である東が中心となって立案し、研究分野によらず、学科教員の誰もが担当できるようにすることをめざした。実際、この 4 年間、東（日本語学）は継続して 1 クラスを担当しているものの、もう一名の担当者は、稲村哲也（文化人類学）、加藤史朗（ロシア研究）、亀井伸孝（文化人類学）と変更している。毎年少しずつ内容を改善しながら、宿題や課題なども含め 2 クラス同じ内容に統一している。

まず、2011年度版の授業予定表で全体像を確認する（表 1 ）。

初回のガイダンスは 2 クラス合同でおこない、その際、学生にこの予定表を配布し、概要説明をする。時間割上配置されている時間帯以外に、 3 回のフィールドワークが組み込まれていることから、アルバイトや部活動などよりも優先して授業に参加するよう、学生に指導するためである[1)]。

そして、本授業の目的として「実地見学や作業、発表を通して、調べること、見つけること、発言すること、聞くこと、作業をすること、読むこと、まとめること、書くことなどの力を身につける」ということを明確にする。

そのための具体的な方法として、半期15回の授業のなかで、図書館見学ツアー[2)]に加え、 3 回の「見学→課題作業→発表→フィードバック」をくりかえし、授業を組み立てている。

授業の最終まとめとして、 2 クラス合同で発表会を実施し、ピア評価もふまえ、各自がレポートを作成する。成績評価は出席率を含めた授業中の活動への参加の様子と、期末レポートによるものとし、 2 クラスの担当教員間で確認・調整をおこなう。

表１：「基礎演習 I」予定表（2011年度後期の例）

見学・課題・発表・フィードバックによる基礎演習 I　クラス a：東　弘子／クラス b：亀井伸孝
実地見学や作業、発表を通して、調べること、見つけること、発言すること、聞くこと、作業をすること、読むこと、まとめること、書くことなどの力を身につける。

回数	日付 a クラス	日付 b クラス	曜日	内容		目的と課題
1	10月4日		火	ガイダンス		今後の日程と課外授業、目的、課題について確認
2・3	10月18日	10月11日	火	図書館		図書館ツアーで「調べる方法」について学ぶ（まず、教室に集合）
	10月11日	10月18日	火	クラス 1		情報検索とは何か、その種類は？違いは？
4	10月25日		火	クラス 2 【情報処理教育センター端末室】		検索の作業
5	11月1日	11月8日	火	クラス 3		AOTS 施設見学の予備調査。見学レポートの書き方の解説 →　見学後、レポート提出（A4　1～2枚）
6	11月2日	11月9日	水	見学 1　AOTS		11時15分～12時45分　AOTS（財団法人海外技術者研修協会中部研修センター） 施設見学。客観的事実が報告できるようによく見、よく聞く。
	11月8日	11月1日	火	代休 1		
	11月15日		火	代休 2		
7	11月22日		火	クラス 4		レポートのフィードバック
8	11月26日		土	見学 2	リトルワールド AIA と NIC（全体で14名内）	リトルワールド：11時～16時 見学前にあらかじめ施設の概要をインターネットなど下調べしておく。 展示や解説などから、次回授業で行うスピーチのテーマを自分で見つける。 資料室と図書館で調べ、スピーチのためのシート作成をする。 AIA（愛知県国際交流協会）：10：30～11：00＋NIC（名古屋国際センター）：13：30～15：00
9	11月29日		火		クラス 5	全員による 3 分間スピーチ。（話す） 聴衆は全員分に対してコメントと質問欄に書き込み提出。（聞く）
10	12月6日		火		クラス 6	
11	12月13日		火		クラス 7	スピーチのフィードバック。グループ討論（5名でグループを編成）。討論の内容をクラスの最後にグループ毎に発表。 JICA 事前調査。グループ学習。
12	12月14日		水	見学 3 JICA 中部 地球ひろば		13：30集合 見学で得たキーワードについて後日グループ発表。必ず文献を引用する。
13	12月20日		火		クラス 8	次回発表への作業。発表用資料作成。（配付資料、ppt など）
	12月27日		火		代休 3	
14	1月17日		火		クラス 9（グループ発表）	2クラス合同で授業。1グループそれぞれ10分の発表＋口頭による質問（5分） コメント質問用紙記入。
15	1月24日		火		クラス10（グループ発表）	
レポート提出（ユニパ）：2月6日〆切						授業で準備したテーマを選択し、発表やそれに対する質問コメントなどをもとに、個人レポート作成。

◆参加型授業で出席重視。
　授業時間帯以外（土／水曜日）に3回の見学があるので、必ず日程をあけること（どうしても不都合な場合、要相談）
◆見学 1 は1限のオラコン終了後、即、集団で移動。（リニモ→八草（愛環）→貝津（愛環））
　見学 2 と見学 3 は現地集合。詳細は追って知らせます。　見学 2 はいずれかに参加します。本日希望表を提出。
◆交通費は自己負担です。
◆課題の提出は授業時に指示するとおり。締め切り厳守。
◆作業→課題提出→フィードバックといった基本の流れを繰り返して授業をすすめます。

2.2　３回のフィールドワークとそれに伴う課題

具体的な訪問先と見学およびフィールドワークの内容は以下の通りである。記載した参加人数は2011年度のものである。

①㈶海外技術者研修協会（AOTS）[3]中部研修センター（豊田市）：各クラスごとに参加

ODA 対象国からの技術研修生を受け入れる経済産業省の国際協力機関である。研修センターでは日本語研修などを行い、研修生用の宿泊施設も併設されている。訪問時には研修担当者の事業概要・趣旨説明があり、研修用の教室、宿泊施設、レクリエーション施設、食堂などを見学し、質問の時間も設けられる。

②ａ　野外民族博物館リトルワールド（犬山市）：学生32名、教員１名[4]

学芸員による博物館の概要説明の後、各自館内を自由見学。その後資料室を利用し、各自が選択したテーマに関する資料調査をおこなう。

②ｂ　愛知県国際交流協会（AIA）あいち国際プラザおよび名古屋国際センター（NIC）（名古屋市）：学生14名、教員１名

あいち国際プラザでは、多文化共生センターの相談・情報カウンターや

日本語教育リソースルームなどの施設見学とともに担当者による事業説明、意見交換がなされる。名古屋国際センターでは、施設見学の後、外国人児童への学習支援事業など身近な国際協力や国際交流事業について説明を受ける。

③ JICA 中部国際センター（名古屋市）
：2 クラス合同で参加

国際協力機構の事業のセンターであり、見学施設を併設する。一般の展示のほか、研修用の宿泊施設なども見学する。JICA の事業説明に加えて青年海外協力隊経験者の経験談を聞く。

いずれも、愛知県内にある、国際協力や国際文化に関わる機関・団体である。実際に訪問することを通して、国際協力や国際文化に関する知識を得ることも一つの目的ではあるが、それに加えて、学問の対象は大学内だけにあるのではなく、日常的な場面において学問的な興味関心が広げられることに気づいてほしいと考えている。

それぞれの見学に対応して課されている、具体的な課題とフィードバックは、以下の通りである。

① AOTS：レポート作成

見学前の講義においてレポートを書くときの注意点、ポイントなどを指導する。引用文献の出典表示の方法や、剽窃厳禁といった点については、すでに 2 回目または 3 回目の情報検索に関する授業で指導済みではあるが、ここでも再度注意喚起をする。さらに、本課題では、一般的に認知度の低い AOTS という組織について、自分自身の見学をふまえて、特定の読者（たとえば高校時代の教員、他専攻の友人など）を想定して報告するという形をとっている。どのような読者を想定して書くかによって、報告内容や前提となる背景知識も異なってくることを意識して書くことの重要性を強調している。

レポートは A4用紙 2 枚程度であるが、そこに客観的事実と自身の意見を区別して示すことを意識させ、どのようなトピックを取り上げることで

読者により興味を持たせるレポートが書けるのか、工夫をするように注意をうながす。

各クラスにおいて、提出された全員分のレポートに担当教員が朱入れをし、次の授業時に、コメントと共に全員分のレポート（氏名は伏せる）のコピーを配布する。書かれたレポートとそれに対する教員の添削をお互いに見比べながら、どのような書き方やテーマ設定がよいのかを検討することで、自分自身のレポートの書き方を考え直すことになる。

ここで重要な点は、この課題が成績評価を出すための課題ではなく、今後よりよいレポートを書くための作業であり、スキルアップを目的としたものであるということである。レイアウトのミスや話し言葉を多用するなどといった用字用語の基本的技術に関する注意点から、テーマ設定のありかた（大きすぎたり、凡庸すぎたり）といったレポートの本質に関わる注意まで、学生がお互いに読み、それをふまえてさらに教員に質問することで、「提出しっぱなし」では得られない教育効果がもたらされるのである。

このプロセスを経ることで、当該授業の学年末のレポートにおいて、一定の進歩が見受けられる。

②リトルワールドまたは国際交流協会：３分スピーチ

見学前にあらかじめ施設の概要をインターネットなどで下調べしておき、見学当日は展示や解説などに基づいて、次回授業で行うスピーチのテーマを自分で見つける。その後、資料室や図書館で調べ、スピーチのための原稿作成をする。

見学の翌日には、スピーチのタイトルと簡単な概要文をポータルサイトを通じて提出し、教員が発表時のプログラムを作成しておく。2011年度のタイトルと概要の一部を以下にあげる（表２）。

授業では、スピーチの際、タイムキーパーとしてベルを鳴らす体験もする。そして以下のようなコメントシートを配布し、学生たちはすべての発表者に対し評価しながら聞く（図１）。全体のスピーチ終了後、コメントシートを本人に配布し、各自が読んでくる。その次の授業で、コメントシートの記載をふまえて、５名程度のグループでどのようなスピーチが望ましいのか、討論をして、その結果をまとめ発表する。

表２：３分スピーチのタイトルと概要の例

「ンデベレ族の家」 南アフリカにありながらも、とてもカラフルな幾何学模様の壁絵が描かれている。この住まいについて、そして現在のンデベレ族の住まいがどうなってきたのかについて報告する。

「ボリビアのエケコ人形」 ボリビアに古くからあるエケコ人形がボリビアの人々にどのように使用されているかなどを発表する。

「チベット仏教の曼荼羅」 ネパールで信仰されているチベット仏教について、特に曼荼羅にスポットを当てて報告する。

「世界の伝統的なトイレの比較」 各国の伝統的な家にあったトイレを比較し、そこからみえる文化の違いを報告する。

「テントから見る遊牧民達の暮らし」 テントの構造に焦点を当て、さまざまな国の遊牧民の共通点や違いを見つけ、当時の人々の工夫や知恵について報告する。

「女性の地位」 中でもイスラームにおける女性の地位に焦点を当て、どういう問題がいまだに残っているのかを報告する。

「国々の遊び用具」 国々の遊び用具の中でも特に、各自の国の文化・社会によって作られる遊び用具が異なっている事について報告する。

「福祉行政の問題点～利用者へのアプローチという観点から～」 AIA と NIC の見学を通じて、国際交流支援という切り口から日本の福祉行政の問題点について考えます。

「外国人児童・生徒への日本語学習支援」 外国人児童・生徒がかかえる問題を指摘し、その支援として AIA･NIC が行っている日本語学習支援事業について報告する。

「私たちにできる国際援助とは」 AIA、NIC 訪問で学んだことを通して国際援助の定義を見出す。またそれを通して具体的に私たちにできる国際援助とは何かを考え報告する。

「愛知県にいる外国人をサポートする施設」 外国人が多い愛知県は多文化共生社会を作るために、何をしているのか。外国人のために設立した施設について紹介したいと思う。

コメントシート　201126・・・　県大　愛子

〈発声〉	悪い	←	ふつう	→	良い
◆速さ	1	2	3	4	5
◆大きさ・調子	1	2	3	4	5
〈内容・構成〉					
◆わかりやすさ	1	2	3	4	5
◆おもしろさ	1	2	3	4	5
〈総合〉	1	2	3	4	5
〈コメント〉					

図１：スピーチに対するコメントシートの例

全員がスピーチをし、それに対する評価をもとに討論をすることから、授業 3 回分の時間を当てている。学生たちの討論を経た発表では、スピーチの際の姿勢、人の注意を引きつけるためのタイミング、発声の工夫、話題の提示のしかた、選択のしかたなど、今後気をつけたいこと、参考にしたことなど、鋭い視点のさまざまな意見が出された。単に発表したり、教員の話を聞いたりするのではなく、お互いに評価しあうことで、自分自身のプレゼンテーションのスキルをもっと上げたいという積極的な姿勢も見られた。また、討論の中で、相互に敬意を持って評価している様子も好感が持てた。

③ JICA：グループ発表（１グループ５名）10分＋質疑応答５分

ここまでの授業で学んだ「調べる」「書く」「話す」「聞く」「討論する」を総合的に使って、グループ発表を行う。JICA の事業に関してグループごとに事前に調査した上でテーマを選択し、見学後は同じグループで作業をし、 2 クラス合同で発表会を行う。ほとんどのグループがパワーポイントを作成し、役割を分担して発表に臨む。質疑応答では、ビデオ録画要員として参加している上級生からの質問だけではなく、 1 年生からの質問も出るようになってきている。さらに、ここでもスピーチと同様のコメントシートを配布し、各グループにフィードバックする。

この発表の準備の段階において、担当教員が直接的な指導をする機会は減っている。くじ引きでグループ分けをした後は、発表の際に必ず文献を引用するように指示を出すことと､学生たちが自主的に調べられるように、教室外の端末室や図書館に行くことを許可するぐらいである。テーマや発表の流れを議論する様子は、グループごとにかなり白熱している。 3 ヶ月間ほどの基礎学習の成果が、学生の学習態度にすでにあらわれていると実感できる。

これまでのグループ発表のタイトルをいくつか以下にあげる（表 3 ）。同じ組織を調査・見学していても、多様な視点での発表があることがわかる。

表 3 ：グループ発表のタイトル例

「JETRO について」	「TUESDAY〜JICA の実態〜」
「世界のつながり」	「日本との医療比較」
「青年海外協力隊について」	「ソマリアの飢餓」
「To be, or not to be ― 人口問題の核心に迫る」	「人身売買」
「発展途上国のこどもたち」	「日本と太平洋の島国」
「シリアの食文化」	「メラネシアの国々への日本の支援」
「Let's ☆国際協力！」	「日本の国際協力の歴史」
「Fair Trade〜that is what we can do〜」	「世界の難民」

以上のように 3 回の「見学→課題作業→発表→フィードバック」といった流れのくりかえしで得たスキルと知識を活用して、学生は期末レポート作成に取り組む。半期の授業において自分自身が考えたテーマのうち、もっとも興味があることについて、書式に従って個人レポートを作成する。レポートの完成度には個人差はあるが、留意すべき最低限の規則にはそれぞれが注意を払っており、与えられた課題にあわせて他の文献の引用部分をコピー・ペーストで貼り合わせただけのようなレポートは見あたらない。それなりに教育の成果が見られるものとして受け止めている。

3．成果のあらわれと今後の課題

現在、この「基礎演習Ｉ」を初めて受講した第 1 期生が 4 年次に在籍中であり、まだ卒業論文としての成果は見ないが、「基礎演習Ｉ」の影響があると思われる学生の活動にふれるとともに、これからの課題についてまとめたい。

3.1 「学生自主企画研究」に見る波及効果

2007年度より継続して行われている愛知県立大学の教育研究センター主催の事業に「学生自主企画研究」[5)]がある。研究を企画した学生グループに対し助成金を出して支援し、成果を公表する事業であるが、2011年度には国際関係学科の学生が代表者となっているグループが 2 件エントリーし、研究活動を行っていた。

ひとつは「グローバル社会に求められる宗教的多様性への配慮―大学食堂調査を中心に―」、もうひとつは「学生の学生による学生のための授業

改革」である。

前者は、日本の大学食堂において、イスラム教徒など宗教上の食の禁忌をもつ利用者への対応について調査するという研究である。その調査の際、1年次に「基礎演習I」で訪問したAOTSを再度訪れて、研修生受け入れの際の文化面での対応について聞き取り調査をおこなった。その報告書は中東イスラーム研究の専門家たちの目にとまり、学術的な完成度の高さを評価されている。3年次になって異文化対応といったトピックに向かい合ったとき、近くにある「現場」に軽いフットワークで調査へと向かったのは、1年次の経験が生きたと言ってよいであろう。

一方、後者は、自分たちが受講している大学のカリキュラム改革を提案する、といった刺激的なテーマであったが、その成果をまとめた『県大白書－県大生に問う真の学びの場とは』は読み応えのあるもので、この研究グループは、当該年度の自主企画研究において最優秀賞を受賞した。1・2年次の段階でかれらが目の前にある大きな問題に対して広範囲にわたるデータ収集をし、短期間で成果を冊子にまとめたことは「研究」の名にふさわしい活動であったし、その中で「基礎演習I」の通年化についても提案していることから、本稿で紹介したような授業活動の必要性が高いと認識されたのだと、授業担当者としては受け止めている。

3.2　課題と発展

上記の自主企画研究の要望を待たずとも、国際関係学科の「基礎演習I」の通年化は、教員側からも望まれるところであった。

国際関係学科では、学科教員が相互に研究成果などを情報共有しあう「Coffee Hour」という会を不定期で開催しており、2012年2月に、本稿執筆者の一人で担当教員である亀井が、詳細に「基礎演習I」の授業での取組みを紹介し、学科教員との意見交換をおこなった。

現在実施している授業内容に関しては、おおむね高評価を得た上で、さらに期待されることとして以下のような点があげられた。

・活字（書籍、新聞）の使用の奨励（webばかりではなく）。
・背景知識を得るための読書奨励（webばかりではなく）。
・注、引用の形式、剽窃禁止などをくり返し教える、言い続ける。
・卒論やほかの授業にも役立つスキルであるということを意識させる。

特に学生の「書籍離れ」は、多くの教員が実感しているところであり、

情報収集の過程や図書館オリエンテーションに伴う課題を充実させるためにも、前期に「書籍に親しむ」ことを意図する基礎演習の前期バージョンを開講する必要性が議論されている。

さらに、この「基礎演習Ⅰ」の学習をふまえて「基礎演習Ⅱ」[6)]、さらには3年次以降の「研究演習」を担当する際にも、「基礎演習Ⅰ」や「基礎演習Ⅱ」で習得済みのことを、学科教員で共有し、何度もチェックする体制作りをしてはどうかといったアイデアも出された。

一見手間がかかるようにも見えるが、こうした情報共有が卒業年次を迎えた学生に対する指導に役に立ち、結果的にスムーズな指導につながるであろう。実際、2年次以降に「研究各論」でレポートを課したとき、既習項目がすっかり抜け落ちてしまっている学生も少なからず存在する。教員が多方面から、くり返し習得済みであることを強調し注意喚起することは効果的であると考えられる。

また、学科教員からは、ほかの授業における実践例も紹介された。たとえば

・専攻言語の英語の授業でも、資料収集、引用、発表のスキルを教えている。
・チェックリストを配布→チェックリストを自作など。推敲の習慣を付けさせる。
・質問、批判も他人のための貢献だと分からせる。聞くことも評価の対象にする。
・質問指名制、コメンテータ制、ピアで想定質問などの取組み。

などである。

このように、教員が授業の中で工夫し、それぞれ学生の学習を支援する一方で、「何もかも教員がリードしすぎてはいけない。可能な限り学生同士の作業で進むような工夫をすべきである」といった意見も出された。

学科の取組みとしては、4年次における卒業論文中間発表会に先んじて、3年次の秋に「研究テーマ発表会」を開催している。このような場に、「基礎演習Ⅰ」「基礎演習Ⅱ」を履修中の1・2年次生も積極的に参加しているが、そこでの質疑応答の様子などを実際に見ることによっても、アカデミックスキルは向上するであろう。「基礎演習Ⅰ」における発表会の場だけでは、質疑応答のレベルを問うところまでの訓練は十分にできていないからである。

今後、学生が自律的に学ぶチャンスを効率的にカリキュラムに組み込んでいくとともに、上級生の活動に連動させて下級生を教育するシステム作りも必要であると考えている。

4．おわりに

経済協力開発機構（Organisation for Economic Co-operation and Development: OECD）の教育事業における「コンピテンシーの定義と選択：その理論的・概念的基礎」プロジェクト（通称 DeSeCo：デセコ）（ライチェン＆サルガニク2006参照）によって、多様性に富み常に変動するグローバル化した世界において、求められる成人の能力概念が整理され、特に重要な以下の 3 つの「キー・コンピテンシー」が定義づけられている。

1）自律的に活動する力
2）道具を相互作用的に用いる力
3）異質な集団で行動する力

OECD の教育事業の新しい取組みとして「成人が持っている日常生活や職場で必要とされる技能（成人力）」を測定することを目的とした初めての本格的な国際比較調査 Programme for the International Assessment of Adult Competencies：PIAAC（成人能力の国際評価プログラム）といった教育調査がすでに2011年に実施されたが、その評価基準にキー・コンピテンシーの概念が活用された。

これらの力は、大学教育におけるグローバル人材育成の視点からも必要不可欠な能力であると言えよう。本稿において紹介した授業実践においても、こうした国際標準に照合される能力をつけることを目標としており、現代的な課題に対応できる力を育成していると確信している。

今後も学科全体で情報共有をし、基礎科目、専攻言語科目、専門教育科目の間で連携を取りつつ、よりよい教育プログラムを提供できるよう、改善を続けていきたいと思う。

謝辞　Edgar W. Pope 教授（国際関係学科）に、英文要旨校閲のご協力をいただきました。また、髙原光さん（国際関係学科 2 年生）に、一部の写真の提供をいただきました。

注

1）日程や時間帯を定めるに当たり、訪問先の都合に加え、学生が授業を履修していない時間帯であることをあらかじめ確認して授業計画を立てている。

2）図書館見学については授業回数の制約により、発表やフィードバックまでできていない。現段階では、図書館オリエンテーション→作業（見学で得た知識の確認メモの提出と自分の誕生日の新聞記事調べおよび情報検索実習）の段階までである。「基礎演習 I」を通年科目とした場合、この取組みにも具体的な発表作業とフィードバックを取り入れるべきであると考えている。

3）2012年 4 月より財団法人海外技術者研修協会（AOTS）と財団法人海外貿易開発協会（JODC）が合併し、財団法人海外産業人材育成協会（HIDA）という新しい組織に変更している。

4）見学先 a 、 b は選択制で学生はいずれかに参加する。

5）愛知県立大学教育研究センターhttp://www.bur.aichi-pu.ac.jp/kyoken/education/jishu/index.html（2012年10月25日閲覧）。

6）「基礎演習 II」は、2011年度まで各教員の研究分野の基礎文献に基づき発表するといった形式をとっていたが、授業ごとに受講生数や教育目標の偏りがあり、改善が必要であるとの議論があった。2012年度より同一時間帯に設定し、「演習における口頭発表」のスキルを学ぶクラスとして、 4 つのクラスに学生を11名程度ずつ機械的に割り振って、 4 名の教員が同一シラバスで実施している。

引用文献

愛知県立大学平成23年度学生自主企画研究「学生の学生による学生のための授業改革」2012『県大白書　県大生に問う真の学びの場とは』

ドミニク S. ライチェン，ローラ H. サルガニク編著　2006『キー・コンピテンシー　国際標準の学力をめざして』（立田慶裕【監訳】）、明石書店

Academic skills training through fieldwork:
The case of "Basic Seminar I" in the Department of International and Cultural Studies, Aichi Prefectural University

Hiroko AZUMA & Nobutaka KAMEI

This paper introduces a program of academic skills training through fieldwork conducted in "Basic Seminar I," a class in the Department of International and Cultural Studies, School of Foreign Studies, Aichi Prefectural University. The content of lessons is presented, as well as the effects of the training and problems to be solved. In an era when universities are expected to develop global human resources, college graduates are expected to possess multiple abilities, including not only language skills but also flexibility, adaptivity and mobility. For this purpose, it is important for students to experience issues of international cooperation and cultural interaction in society through fieldwork in the early stages of the university curriculum. Following up on this experience, faculty must continue to foster students' academic training so that they will be able to choose the themes of their graduation theses with full consciousness of themselves as autonomous members of global society. It is also essential for the faculty to share information with each other in order to enable students to advance smoothly from the 1st and 2nd year level to the 3rd and 4th year level.